

— 2年・稲垣実践 —

— 「とっておき」の分類は子どもたちの地域への愛着を測る「ものさし」になるのか?—

「地域の場所と自分の関わりを見付け、地域にある様々な場所やそのよさに気づき、それらに親しみや愛着をもって地域の一員として安全に適切に生活しようとする力」を引き出すことをめざし、「とびだせ、ふぞくタウン！キラキラたんけんたい」の単元に取り組んだ。公開研のテーマに「子どもと教師でつくる『学びのものさし』」とある。つまり、本単元の「ものさし」が測るのは、探検を通して子どもたちがどれくらい地域への愛着や安全・安心の感覚を得たかとなる。では、何が「ものさし」になるのか？子どもたちはまち探検をくり返し、見つけたものや気づいたことをふぞくタウンのマップに書き込む。そこから「とっておき」の一つを選び、専用シートに絵や文章で表現する。本時ではクラス全員のとっておきを黒板に貼り、一つ一つ理由や意味を確認しながら分類する作業に挑戦した。分類という知的作業は情報やアイデアを整理するのに有効だが、どんなまとまり（カテゴリ）をつくるかが難しい。よく知られたKJ法のように似たものどうしをまとめても、あたり前のカテゴリしか生じない。自分独自の視点や発想を込めてこそ、雑多な情報が新たな理解や価値を内包したまとまりへと変貌する。

2Cが全員の「とっておき」から生成したカテゴリは、地域への親しみや愛着、探検を通して得た学びや成長を表していただろうか？1回目の探検後（7/14本時）と、2週間後の2回目探検後（12/14）の分類結果を比べてみる。1回目のカテゴリ名と「とっておき」は①しょくぶつ：レモンのおいのはっぱ、むらさきの花、すずらん、ピンク色とむらさき色のお花、②たべるみせ：いいにおいがする天下一ばん、からあげやいいにおい、③たてももの：山にあるおてら、きいろとちやいろがまざったびょういん、だった。「とっておき」は五感を生かした気づきだったが、感じたままの記述にとどまった。また、カテゴリは建物や植物など単なる属性にすぎなかった。どこの地域や学校で探検しても、似たカテゴリは生じるだろう。2C特有のふぞくタウンへの親しみや愛着を込めるには、探検時の見方、考え方をより明確にし、思いを素直に表現できる仕掛けが必要だった。そこで、2回目探検は視点ごとに探検隊を組織し、子どもたち自身が隊名を考えた。おとやにおいかんじるぞたんけんたい、いろいろ形たんけんたい、花いっぱいたんけんたい、などだ。この意識づけにより視点が絞られ、2回目のマップには見つけたもの、ことがぎっしり書き込まれた。厳選した「とっておき」は記述が詳細で、下線部には関りの多様性と情緒の豊かさを感じる。①おもしろい（えがおになる）：はちのすみみたいなマンホール、「人」がたくさん書かれたマンホール、ピンクと白のあさがおがおもしろい色、上半身が赤で下半身が青の（人型の）信号。②気もちよくなる：さわやかな風の音、名まえはわからないけどきれいな花、大きな石の上があたたかい。③うれしくなる：ちいきの人が花をかざる、花のまわりにオーラがあってラッキーな花みたい。④わかりやすい：あんないしたやじるし、よこむきのやじるしの方にいきたくなった。⑤あんぜんにすごせる：しんごうがかたまつて（いっぱい人がとおる）、しんごうをそうさするきかい（じこにならないように）、しょうかせん（かじがおきてもあんぜん）。①～③は情感を、④・⑤は新たな気づきや理解を表すカテゴリで、視点が格段に広くそれでいて細やかでもあった。同じ対象でも記述が変化した例では、1回目は「花をそだてているビニールハウス」だけから、2回目は「花をたくさんそだてていたからたいへんそうで、てつだってあげたくなった」と共感を含んだ。探検と表現・分類のくり返しがふぞくタウンへの愛着を育み、自ら地域に貢献しようとする意欲が芽生えている。